

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470600285		
法人名	サントラフィック株式会社		
事業所名	グループホームふるさと		
所在地	三重県津市戸木町4113-56		
自己評価作成日	令和4年6月15日	評価結果市町提出日	令和5年4月10日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JizyosvoCd=2470600285-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和5年3月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ふるさとでは天然温泉大浴場がありのんびりと入浴が出来ます。四季折々の催し(行事)があり楽しく生活しています。自然が多い環境下であり裏には「東屋ガーデン」があり散歩コースになっています。野菜等も作っています。数年前から外国人実習生制度を取り入れておりすでに溶け込んでいます。災害・感染症対策には近年力を入れて取り組んでいます。備蓄の管理も勉強会を通じて話し合いをしています。コロナ感染予防の観点から外出は控えていますので屋内でのレクリエーションに力を入れています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

この事業所では利用者と職員、職員と管理者、職員間の人間関係が円滑が上手くいっており、理念の具体化にむけて笑顔絶やさず誰もが家族同様に過ごせるような運営がされている。コロナ禍によりさまざまな制約が生じている中で、人間関係が円滑であるのは職員全体が日常的に率直でしかも他人に配慮したやり取りがなされているとわかる。事業所は住宅街の隅に設置されて静かな環境であり、建物が木造住宅のため内部に柔らかさを感じる住み心地のいいところである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「笑顔・家族」を現場でのモットーにしており職員間で共有している	今の理念は10年以上前に職員とともに検討・設定し、ホールの入口に貼ってある。利用者に関わるときいつも笑顔を絶やさず、事業所を家族に近い共同生活の場として考えて取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域とでの清掃活動や餅つき等に管理者が参加し交流をもっている	コロナ禍以来、運営推進会議の場以外は地域や自治会との交流がない。以前は餅つきすると役員が参加してくれた自治会も、コロナ禍で行事がされておらず、事業所としてのイベントは事業所だけで取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域運営推進会議などを通じて理解を得ている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナの状況下ではあるが会議は年6回実施しているが家族の参加は今のところない	会議は年6回開催している。コロナ禍で外部は自治会役員だけが数名参加し、行政・地域包括・民生委員・老人クラブ・家族等には案内していない。会議は隣接する同一法人運営のグループホームと共同で開催している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	津市本庁介護保険課や援護課へ行き意見交換している。情報の共有もしている。	何か用があればいつも市本庁に出かけている。介護保険課や援護課(保護利用者もいる)には制度的なかかわりで行くことが多い。要介護認定については家族に対応してもらっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に数回会議後に勉強会をし理解している。出来る限り個々に応じて対応している。	毎月事業所内の勉強会をしており、3ヶ月に1回は身体拘束や虐待問題で勉強している。しかし身体拘束等適正化委員会の設定、位置づけがされていない。	身体拘束防止についての内部研修はしっかりされているが、身体拘束等適正化委員会が設定されていないため、早期に設定されるよう期待し、研修が一層充実されるよう望まれる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に数回会議後に勉強会をし虐待が起こらないように環境整備をしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在数名が市と後見人制度利用の準備を進めており職員も学ぶ良い機会である		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者が入居の際に細部に渡り説明し理解を得る様努めている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	エレベーター内にご意見・ご要望箱を設置しているが管理者や職員に直接話をしてくれます。内容なども連絡ノートを活用し皆が共有している。担当制を付けず管理者が中心となり対応している。	コロナ禍以来、事実上面会不可状態で、家族が来訪されても窓越し面会になっており、家族は通院に同行したり、TEL連絡で利用者と交流している。家族からの要望・意見は特に出ていない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者が週2回の法人本社会議に出席し本社長・他部署管理者とも意見交換などしている。数ヶ月に数回本社長には個人面談結果(管理者が職員に実施しまとめる)書類を渡し意見の反映に取り組んでいる。	月1回、ふるさと会議を行い、意見交換・研修・カンファレンス等に取り組んでいる。利用者への取組み方は意見が活発で、事業所への改善要望あれば管理者から社長に伝えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	本社長に個人面談結果を提出し職員の思い等伝え対応している		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	隣接するグループホーム・デイサービス・ショートステイの職員とも合同での勉強会もあり意見交換や学習する機会がある		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	合同での委員会や勉強会などがありそのような場を作り取り組んでいる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	「気付き」を常に心掛け入居者や家族の不安や要望に対応している。その中で関係作りも大切にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	担当制を取り入れず管理者が中心となり家族等の不安や要望に対応している。普段から意見交換をし関係作りをして信頼を得られるよう努力をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	提携医や隣接施設の看護師にも助言を得ながら連携し管理者が判断している		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	現場独自の「笑顔・家族」を大切に気持ちや思いを共有しながら関係作りをしている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	「事前調査票」を作成し入居後は職員で共有し対応している		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	基本的には個々の外出は家族が対応している。日用品や趣味関係の買い物などは管理者が対応している。状況により柔和に支援している。	コロナ禍のため利用者は昨年7月以降、外出できなくなった。それまではコロナ禍でも外出はしていたが、周囲の感染増加でできなくなった。それで馴染みとの関わり等、外出が必要な時は家族対応になっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常はホールで体操等のレクリエーションなどで集まる際や食事の際に会話したり助け合いをしており職員は状況に応じてさりげなく支援をしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	状況に応じて相談・支援に努めている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	傾聴を常に心掛け言葉より表情(しぐさ)で思いを察知し寄り添い支援できるよう職員同士情報を共有している。何より傾聴です。	利用者の思いや意図を把握するよう、傾聴と声掛け、本人の仕種・表情に注意を払っている。把握した思いや気持は連絡ノートに記録し、職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前調査票の欄に生活歴を記入していただき入居時から活用し職員は把握し対応している。家族からも情報共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1日2回(起床時・午後)バイタルチェック(血圧・体温)をしている。体調変化時は酸素飽和度(spo2)も測定している。居間の温度・湿度管理は1日3回(朝・昼・夕)している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画・モニタリングは介護支援専門員が作成している。月1回の定例会議で話し合い課題について議論している。家族へは直接管理者や職員が説明・理解・サインをいただいている。	利用者の状況は毎月のカンファレンスで意見交換し共有している。モニタリング・ケアプランは6カ月毎にケアマネジャーが見直し、記録している。日々の介護記録は簡潔にまとめられている。ケアマネは介護業務と兼務である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	連絡ノート・受診記録・介護記録を中心に職員で共有している。早期解決事項の際は管理者不在時でもその日の出勤者だけで決定することもあります。連絡ノートなどが重要であると皆が共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の思いを出来る限り汲み取りながら新しい事にも取り組んでいる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	職員間で常日頃から話し合いをしている。沢山の知恵や情報を出し合い楽しめるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現時点で全員提携医の訪問診療で対応している。訪問診療日はそれぞれ決まっているがいつでも相談・支援してもらえる状況である。昨今ではコロナワクチン接種でも安心して訪問診療で対応してもらいました。	協力医は毎月来診するので、利用者はみな受診している。専門医への通院は家族が対応している。歯科へは必要の都度受診している。看護師はいないが、法人内事業所にいる看護師が必要に応じて対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	隣接施設(ショートステイ・デイサービス)に看護師がおり相談したり助言をもらえる状況である。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	管理者が中心となり医療関係者などと情報交換している。隣接施設ショートステイにも状況によっては支援してもらっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居前の段階で施設の設備上重度化や終末期に対する支援は困難であることは管理者が伝えている。しかし入居後に家族の意向で終末期対応をしたケースがある。提携医や職員とも相談し家族の意向でもある終末期ケアの判断を管理者がしました。	事業所としては終末期対応はしておらず、家族には入居時に説明してある。しかし重度化しても転居を嫌がるケースには協力医の指導の下、最後まで世話をした例はある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急発生時における勉強会を開催している。AED使用実演等様々な状況を想定し対応している。津市消防ホームページも活用している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回(5月・11月)消防訓練実施している。地域住民の参加は実現出来ずにいるが運営会議時に管理者から火災・災害発生時は協力の要請の声をさせて頂いている。	法人内事業所が隣接しているので、防災訓練は合同して行っている。通報・避難・救命救急・夜間想定等を訓練している。台風で停電をしたので、発電機の設置を会社に要望している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	各居室毎にトイレがあり排泄介助後は新聞・広告等使用し一人一人にきめ細かな対応をしている	利用者への適度な対応・言葉がけに注意を払い、言葉で傷つけないようにしている。利用者間に言い争いが生じたら、職員二人が中に入り、一方だけに肩入れしない工夫をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者様の気持ちが一番大事であると認識しており出来る限り支援している		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の都合にならないよう皆で声を掛け合いながら支援している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性が多いのも関係しているが化粧をしたり香水をしたり髪をといたり自らされているのをさりげなく支援している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材・献立表は業者委託の為決定している。調理・盛り付け・片付け・お膳拭きは一緒にしている時もある。日曜日にはおやつ作りも良くしている。	業者からの食材・レシピにより、職員が調理している。おやつも業者からきている。誕生会等の行事食は利用者の希望を聞き、すべて自前で調理、提供している。できることは利用者と一緒にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	業者委託の為にカロリー計算や栄養のバランスもしっかりしている。体調不良時には職員がお粥を作ったりしている。また嚥下の状態に合わせて刻みにしたりしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケア見守り・毎週日曜日には義歯対応の方にはポリデント洗浄している。必要時に応じて歯科訪問診療もお願いし支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各居室にはトイレが設置してあり一人一人に合わせて排泄誘導し可能な限り失禁を減らせるよう支援している。全体の誘導時間も決まっている。	排泄チェックにより、排泄誘導はこまめに臨機応変にしている。全員がリハビリパンツ使用、1名は夜間のみおむつ使用で、全員何らかの排泄介助や見守りを要するが、失禁は少ない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	レクリエーション時にもお口の体操など取り入れたり毎朝食時には乳酸飲料を飲んだり取り組みをしている。コロナ禍で外出困難の状況の為ストレスを溜めないよう努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日や時間帯はある程度決めているが希望があったり体調に応じて出来る範囲で支援している。温泉の湯で大浴場の為ゆったり入浴している。	隣接するデイサービスが温泉の湯を運んで入浴しているので、その大浴場を活用して午後に入浴している。週3回入浴できるよう、利用者を二組に分け交代しているが、体が汚れた利用者は臨機応変で入浴している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後にも休息時間を設け昼寝をされる方も見える。有意義に時間を使っていたいでいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	投薬表や受診ノートを活用し病名や薬名を出来る限り理解し支援している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	体操や歌、貼り絵、編み物、洗濯物たたみ等一人一人に合わせて支援している		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ベランダから景色を眺めたりしている。コロナ禍の数年前にはよくドライブで青山高原や片田水道局、近くの公園など行きました。現在は外出・面会は控えている。今後は状況をみて判断していきたい。	コロナ禍のため昨年7月以降、事業所としての外出ができなくなっているが、利用者は事業所の窓から外を眺めたり、裏庭に出ている。通院・買い物・その他で外出が必要な場合は、家族が同行して外出している。	コロナ禍によって外出にかなりの制約が生じて事業所も苦労しているが、制約がある中でもさまざまな工夫により外出の機会を配慮している例もあるので、事業所として外気に触れる計画を具体化されることを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は事業所でしている。コロナ状況下で外出困難なので金銭を使用する機会が少ない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ふるさと便りを年6回送付しており行事の報告や写真などみてもらっている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	檜の素材をふんだんに使用しているので自然の匂いがする。全室ベランダで繋がっている空間である。掲示板には行事やレクリエーションで作った貼り絵や写真を飾っている。居室に貼って見える方もおられます。	食堂兼ホールはやや狭いが、昼はみなが集まり思い思いに過ごしている。廊下壁面のあちこちに手作りの細工物を貼ったり、個室扉に表札代わりに写真等が張り付けられ、にぎやかさを思わせる。建物内外は木製素材の柔らかさを感じさせる住居である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	広いとは言えない空間ではあるがその中で職員が工夫しながら椅子を並べたりし会話やレクリエーションを楽しんでいる		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間・ホール・各居室全部に床暖房を使用している。特に冬場の寒い日には喜ばれる。若いころ使用していた着物を持参されて見える方もいる。本人に合わせて支援している。	ベッド・エアコン・クローゼット・棚・洗面台・トイレ等が設置されており、利用者は身の回りで日常使用するものさえ持ち込めばいいように工夫されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	広い空間ではないが職員が色んな工夫をしながら支援している		